2017年08月26日 中日新聞 朝刊二社 32頁

新種「ミカワサンショウウオ」

愛教大など命名 愛知東部だけに生息

愛知県東部だけに生息する小型のサンショウウオが新種であることを、京都大や愛知教育大などの研究グループが遺伝子解析などで突き止め、「ミカワサンショウウオ」と命名した。生息域が非常に狭く、絶滅の恐れがあるという。日本爬虫両棲類学会の英文誌に発表した。

茶褐色で、体長九センチ前後。愛知県新城市などの森林や湿地帯に生息、湿地内の流れの緩い水域で繁殖する。東北地方などの日本海側にいるクロサンショウウオや石川、富山両県のホクリクサンショウウオに近いが、脚が短いなどの違いがあり、遺伝子解析でも別種であることが分かった。

中部地方西部に分布していた祖先の種が山岳地帯の形成によって、日本海側と太平洋側に分かれたと考えられるという。

このサンショウウオの存在は一九九〇年代に確認。見かけの違いから、愛知県の絶滅危惧生物リスト(レッドリスト)は「近い将来の絶滅の恐れが極めて高いサンショウウオの一種」としたが、名は付いていなかった。

日本には小型のサンショウウオが約三十種いるが、絶滅の恐れがあるとされる種が多い。

グループの松井正文京都大名誉教授（動物系統分類学）は「環境の変化やマニアの乱獲で絶滅する可能性が大きい」と指摘。「条例や法律で捕獲禁止などの処置を取ることが緊急の課題だ」としている。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています